

# 豊かな文字文化を育むための書写指導の工夫

## —中学校における毛筆書字活動を通して—

林朝子

The way of Penmanship Instruction for Creating Rich Culture of Writing  
—Based on Practice of Writing ‘Kanji’ with Brush in Junior High School—

Asako Hayashi\*

### 要 旨

本実践では、附属中学校3年生を対象に、平成29年版学習指導要領で書写に求められる「文字そのものの文化」と「文字を書くこと」の両面を踏まえた活動「古典を生かして創作しよう～陶淵明「四時」を行書で書く～」を行った。行書の書き方の復習、行書の古典作品を見ることで、過去から現在まで文字の同じ書き方が続いていることを実感するなど、文字そのものへの関心が高まる様子が見られた。また、古典の文字表現を基にした創作を通じて、実際に文字の多様な書き方を体験し、表現することへの楽しさを感じ、お互いの表現の違いを個性として認め合うなど、文字表現の幅広さへの気づきも見られた。

キーワード：文字文化 毛筆 行書 書の古典 創作

### 1. はじめに

本稿では附属中学校（以下、附中）3年生を対象に行った、豊かな文字文化を育むことを目的とした書写実践を紹介すると共に、事後アンケートから実践を通して生徒が文字文化や文字表現の豊かさをどのように感受できたのかを明らかにする。

現在の中学校では、平成20年告示の学習指導要領に（以下、H20指導要領）に基づいており、附中で使用されている書写教科書（学校図書『中学校書写』もH20指導要領に則して編集されている）。H20指導要領国語科「教科の目標」では「言語感覚を豊かにし、国語に対する認識を深め国語を尊重する」に留まっていたが、平成29年告示の学習指導要領（以下、H29指導要領）では「言語感覚を豊かにし、我が国の言語文化に関わり、国語を尊重」と改訂され、「教科の目標」として「言語文化」という文言が明記された。令和3年度からH29指導要領に基づく教育課程が完全実施されることを見据え、書写で扱う「文字」に特化した言語感覚、言語文化に関わる授業・活動を行うことにより、生徒の豊かな文字文化を育み、国語における言語感覚、言語文化を豊かにすることにつながると考えた。「文字」に対しての言語感覚、「文字」という言語文化という視点に立ち、今回は書の古典に基づく創作を取り入れた実践を行った。

### 2. 学習指導要領における文字文化の側面

#### 2-1. 書写の位置付け

H20指導要領で国語科の内容は「A 話すこと・聞くこと」「B 書くこと」「C 読むこと」〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕で構成されており、書写は〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕に位置づけられている。H20指導要領解説で「言語文化」とは「我が国の歴史の中で創造され、継承されてきた文化的に価値をもつ言語そのもの、つまり文化としての言語、またそれらを実際の生活で使用することによって形成されてきた文化的な言語生活、さらには、古代から現代までの各時代にわたって、表現し、受容されてきた多様な言語芸術や芸能などを幅広く」指すものとされている。

H29指導要領では国語科の内容が〔知識及び技能〕及び〔思考力、判断力、表現力等〕という構成になり、書写は〔知識及び技能〕(3) 我が国の言語文化に関する事項に位置づけられた。H29指導要領解説でも「言語文化」については、H20指導要領解説と同様の内容である。

「言語文化」には「文化としての言語」「文化的な言語生活」「言語芸術」までが含まれるものであることが示されているように、書写指導では文字や書字の視点から言語文化へのアプローチを実践していくことが求

\*三重大学教育学部

められている。

### 2-2. 「文字文化」の指導内容（下線は筆者による）

中学校学習指導要領において「文字文化」の側面が主として扱われるのは第3学年である。

H20 指導要領で第3学年指導内容は「身の回りの多様な文字に関心を持ち、効果的に文字を書くこと」とされ、H29 指導要領では「身の回りの多様な表現を通して文字文化の豊かさに触れ、効果的に文字を書くこと」と広がりのある内容となっている。H29 指導要領では「表現」という文言が加わり、多様に表現された文字に触れたり、また、実際に様々な文字を表現したりすることが含まれることとなった。

H29 指導要領解説では、「文字文化」について「上代から近現代まで継承され、現代において実社会・実生活の中で使われている文字の文化であり、我が国の伝統や文化の中で育まれてきたものである。文字文化には、文字の成り立ちや歴史的背景といった文字そのものの文化と、社会や文化における文字の役割や意義、表現と効果、用具・用材と書き方との関係といった文字を書くことについての両面がある」としている。ここから、H29 指導要領で求められている「文字文化」は、歴史的な「文字文化」だけを指すのではなく、実際に文字を書くことも踏まえた「文字文化」であることがわかる<sup>1)</sup>。

## 3. 附属中学校での実践

2. で取り上げた H29 指導要領で求められる「文字そのものの文化」「文字を書くこと」の両面を踏まえ、附中3年生を対象に、毛筆による作品作りの実践を行った。今回は、文字表現の豊かさを知り、体験することを目的とするため、太さ、大きさ等、幅広く表現に変化を付けることが可能な毛筆を使用した。

橋本他(2020)が指摘しているように、中学生にとっての「身の回りの書」には毛筆書字を含んだ手書きよりも活字によるものが多いであろう。しかし、本実践では、活字ではできない表現を体験し、また、その体験が活字使用時のデザイン構成力等にもつながるものとして捉え<sup>2)</sup>、手書きと活字を総合的に踏まえた「文字文化」活動と考え、実践を行った。なお、実践には学生4名も支援者として参加した。

### 3-1. 概要

- テーマ：古典を生かして創作しよう  
～陶淵明「四時」を行書で書く～
- 実施日：令和2年2月20日（100分×2クラス）  
2月21日（同上）
- 対象：附中3年生4クラス・140名
- 準備：書道具、紙（半切1/3・約35×45cm）、

全紙用下敷（90×150cm）、配布プリント

教室：被服室、机は4人掛け

流れ：作成プリントを配布

- 30分：①行書の表現の豊かさについて  
②創作について
- 20分：③創作のための原稿作り  
<休憩>
- 35分：④創作  
5分：⑤押印  
10分：⑥鑑賞  
後日、アンケート提出

### 3-2. 実践内容

①～③は配布プリント（資料A・B）に基づき、生徒とのやり取りを行いながら、進めた。



#### 3-2-1. ①行書表現の豊かさについて

①の活動では、主として文字を見ることを通して、文字そのものの文化を捉えることを中心とした。まず、中学校で学ぶ行書の書き方について確認するために、楷書と行書の違いについて取り上げた。生徒1～2名に皆に見えるようにホワイトボードに「学校」という語句を書いてもらった。まずは普段通りに書いて

もらい、次は「急いで書いて」というように慌てて書くように仕向けた。普段通りに書く場合は楷書で書き、急いで書く場合には点画の省略など行書の要素が表れており、行書を書く場面、行書という書体の存在する意味を改めて意識する機会となった。生徒の書いた文字を用いながら、「学校」を行書で書いた際に現れる「点画の連続」「点画の変化」「点画の省略」「筆順の変化」「筆脈」<sup>3)</sup>という行書の特徴について確認を行った。

次に、「毛筆表現の古典」として王羲之『蘭亭序』<sup>4)</sup>を取り上げ、上述した行書の特徴がどこに現れているかを探る作業を行った。約1700年前に現在と同じような漢字が使用され、行書の書き方がされていることに驚いている生徒もあり、文字文化の歴史的な流れを感じることのできる活動になっていた。『蘭亭序』を初め、現代まで表現として学ぶことの多い作品を「古典」と表現するが、生徒にとって「古典」とは「古文漢文」を指すものというイメージが大きく、「書の古典」という言い方を意外に受け取っている者も多かった。

### 3-2-2. ②創作について

②では、実際に文字を書く(創作)に意識を向けていく活動を行った。

まず、「学校」という文字を例とし、「古典を生かした創作」をすることは何をする事なのか、という点について取り上げた。資料1~3は拡大コピーをし、ホワイトボードに貼った。資料1は「学」「校」の字を集めたもの、つまり、「集字」したものである。毛筆の文字は字典『大書源』(二玄社)<sup>5)</sup>から抜粋したものであり、硬筆の文字は使用教科書の最後に付けられている資料「漢字一覧表(行書)」<sup>6)</sup>から抜粋したものである。



資料1「学校」集字

次に、基本的な書き方の「学校」(資料2)と古典から選んだ「学校」(資料3)を掲示し、その横に、実際に資料2、3を参考にし

て書いた毛筆作品を並べた。



資料2「学校」  
教科書行書文字

→ 資料2を参考に書いた例



資料3「学校」  
古典行書文字

→ 資料3を参考に書いた例

印刷された文字とそれを参考にした書字作品を並べることで、集字した文字をどのように活用し、文字として表現されるのかを捉えることができていた。

そして、「書字方向」についても取り上げた。今回は創作のための紙として半切1/3(約35×45cm)を使用した。半紙より少し大きく、紙も縦・横を各自で選べるようにしたため、創作時の文字の配置も各自で考える必要があり、書字方向について取り上げることとした。

資料として、「つながり合う個」「赤福」という文字のカラー写真を拡大コピーしたものを使用し、ホワイトボードに掲示した。「つながり合う個」は、附中の玄関口に掲げられている扁額であり、また、同じものが彫られた石碑も玄関近くに設置されている<sup>8)</sup>。書字方向は左から右への横書きである。「赤福」は三重県伊勢市の和菓子屋本店看板の木に刻字されたものである。生徒らに「福赤」のような書き方を見たことがあるかという質問への反応は「古い横書き」というものであった。「福赤」のような書き方は、寺社などの扁額にも多く見られるため、古い横書きかと思っただけであった。「横書きではなく、1行1文字の縦書きである」ことを伝えると、驚きと共に、「読みやすくなった」という感想も聞こえてきた。創作の際の書字方向についても意識を向けさせると共に、現在も身の回りにある扁額や看板等の書字方向についても縦書きの文化が反映されていることに気付く機会となった。

3-2-3. ③創作のための原稿作り

創作の題材として、陶淵明（陶潜）の漢詩「四時（しじ）」を取り上げた。漢文漢詩は、指導要領において古典として取り上げられており、書写と同じ H20 指導要領〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕、H29 指導要領「我が国の言語文化に関する事項」に位置づけられている。国語科の事項での連携も鑑み、漢詩を取り上げた<sup>9)</sup>。また、陶淵明は高等学校教科書でも「桃花源記」「飲酒」などが取り上げられ、高校入学後にも目にする作者である。「四時」は高校国語科教科書では取り上げられてないが、五言絶句で春夏秋冬の四季を詠んだ詩であることから、生徒にとってもイメージしやすく、取り組みやすい題材であると考えた。漢詩については、まず、書き下し文を 1~2 名で音読後、意味を確認した。

次に、「創作の手順」について説明を行った。作品に書く語句を決め、古典を生かした創作は全員が初めての体験であった。創作の手順は以下のように進めた。

- (1) 「四時」から語句を決める（2~5 文字）
- (2) 原稿を作る（小筆、鉛筆など使用）
  - ・基本の行書の書き方を基に、古典を参考にしながら、字形を考える。
  - ・紙を縦横のどちらで使用するかを定める。
  - ・文字の大きさ、配置などを工夫する。
  - ・「名前□」（□=印）の大きさ、配置も注意する

「四時」から語句を決めるとしたが、20 文字の中から漢字を選び、自由に語句を作ってもよいとし、字数については、創作時間も鑑み、2~5 字とした<sup>10)</sup>。

基本の行書の書き方は、「学校」でも使用した教科書の「漢字一覧表（行書）」から抜き出した（資料 4）。「嶺」は常用漢字外（人名用漢字には含まれる）ため、一覧表にはないため、「岸」と「嶺」を挙げ、それぞれを組み合わせ「嶺」を作るよう伝えた<sup>11)</sup>。



資料 4 「四時」基本的な行書文字

古典からの集字は、「学校」と同様に『大書源』から 20 字を抜粋した（資料 5）。楷書寄りの行書から草書寄りの行書を取り上げた。字書からの集字を見た生徒のコメントには「いろいろある」「これかっこいい」「どうやって書くの」などが挙げられ、表現された文字の様々な様相を感じ取っているようであった。



資料 5 「四時」字典からの行書文字

紙の縦横の使用方向については、文字数、字の大きさ、配置のイメージから、どちらに使用するかは各自で選択するようにした。書字方向も、現代の横書きも可とした。

最後に落款<sup>12)</sup>として名前と押印をすることとした<sup>13)</sup>。黒と白の作品の中に、落款で朱色の印が入ることにより、作品に対する印象がどのように変わるのかも感じてもらおう機会にもなった。

3-2-4. ④創作、⑤押印、⑥鑑賞

③での原稿作りに引き続き、④⑤は個人作業であったが、4 人掛けの机であったため、お互いの作業の様子を見たり、話し合ったりしながら、作業を進めていた。⑥鑑賞については、最後に 5~10 分ほど時間を設け、机に各自の作品を置いて、見て回ることをしたが、⑤押印で時間がかかっている生徒もあり、全員がまわって作品を見て回ることはできなかった。しかし、③~⑤の作業の際に、グループ内での鑑賞や近くの生徒の書く様子を見たりしており、鑑賞もしながら、創作

作業を行っていたと考えられる。



実践の様子

#### 4. 生徒の反応

生徒のアンケートへの自由記述を基に、本実践を通し生徒にどのような変容が見られたのかを1)文字そのものについて、2)文字を書くこと(創作)について、3)表現の広がりについて、という3つの観点を中心に見ていくこととする。

##### 1) 文字そのものについて

- ・行書はとても読みにくいが美しさを持っている。
- ・もっといろいろな文字で試してみたい。
- ・他の漢字はどのように変化していつているのか知りたい。
- ・どうやってこの字ができたのか、この字がどこで使われているのかを知りたいと思った。

- ・行書以外にどんな書き方があるんだろうと思った。
- ・今とは少し違って、いろいろな形、書き方があっておもしろくて、もっと昔の字を知りたいと思った。

文字の美しさを感じたり、他の文字や書き方に興味を持ったりしている様子が見られる。「行書は読みにくい」というコメントから、日常的に行書という少し点画に変化のある字を見る機会があまりない、または、周りにある字を意識していない・気づいていないという状況が窺える。

- ・いろいろな人が書いた書道の作品を見てみたいと思った。
- ・看板や標識でどのような字体が使われているのか調べてみたい。
- ・時代、書いた人によって、同じ字でも全く違うように見えた。
- ・古典における字の美しさの観点を知りたい。
- ・昔の人の字は形は崩れていても、自然な書き方になっており、書きやすかった。

時代や書いた人によって文字が変わることや、他の作品や身の周りの文字へ関心を向けているコメントがあり、文字に関しての意識が横への広がり、縦への広がりを持つきっかけになっていると考えられる。具体的に古典の字に「美しさ」を感じたり、実際に書いてみると古典の書き方が「自然」な書き方で書きやすいという発見をしたりしていた。このような発見や気づきは見るだけで得られるものではなく、実際に毛筆を使って表現をすることで感じ取れるものであろう。

##### 2) 文字を書くこと(創作)について

- ・自ら創作する楽しさを知った。
- ・自分なりの文字ができたようで楽しくおもしろかった。
- ・自由に表現ができ、とても楽しかった。
- ・ここの部分はこの字を参考にしようかなと色々組み合わせるのが楽しかった。
- ・一度も書いたことがない字を書くのは新鮮に感じた。
- ・班のみんなで話し合いながらできて良かった。

「楽しかった」「おもしろかった」というコメントが多く見られた。自分で語句を書いたり、古典を参考に字形や表現方法を考えていったりする過程を楽しんでいる様子が窺える。「書いてみよう」「書きたい」という気持ちを維持しながら、表現を続けることができたであろう。また、4人グループの班で向かい合わせに座ったことで、友達の工夫を見たり、行き詰った場合に相談したりしながら作業ができ、個別性を持ちつつ、協

働が行われていたと言えるであろう。

- ・画数が少ない漢字を選んだけど、画数が多いのと同じくらい難しかった。
- ・簡単に書くことができると思っていたけれど、難しく、全然上手に書けなかった。
- ・普段に鉛筆とかで書いているのとは全然違いがあった。

毛筆で実際に表現することで、見ているだけでは気づけないことや硬筆で書く場合との違いについて、感じ取れていることがわかる。

- ・文字を書いているうちに、すごく落ち着いた気分になった。
- ・心が一つになった感じがした。

本実践で目的としていたわけではないが、集中して文字を書くことで気持ちの面で落ち着くことができたのであろう。

### 3) 表現の広がりについて

- ・しっかり太く書く人もいれば、わざとかすれさせている人もいて、独特の世界観かなと思った。
- ・同じ字を書いても表現の仕方が違って見るのが楽しかった。
- ・字体を変えるだけで雰囲気も変化するのがおもしろかった。
- ・文字のかすれ方や印鑑・名前などがどれも違って、味があると思った。
- ・普通を書くよりも、その時のその人の感情が字にうつっているように見えた。
- ・なぜその文字を選んだのかを聞いてみると、意外な理由があったりして、驚いた。

自分や同級生の創作に取り組む様子や作品を見ることで、それぞれの個性を感じ、その個性や違いをお互いに尊重し、受け入れていることが感じ取れる。書写の授業では、教科書等の1つの文字例があり、それを参考に書いていくことが多く、「文字例に近づけることが書写の目標」と意識的・無意識的に思い込んでいる生徒が多い。しかし、本実践では、古典の文字を提示してはいるが、それらを参考に表現を考えていくように促した。その結果、様々な表現が紙面上に現れ、このようなコメントが多く見られたのであろう。

2) 文字を書くこと（創作）で取り上げた気持ちの面と3) 表現の広がりについては、杉崎（2017）の中学生を対象とした毛筆実践の結果として、「文字を書くことは言語能力を高めるだけでなく、表現するという側面において情操に働きかけて心を耕し、個性伸長を図る機能を有している」という指摘との共通点が確認できた。

## 5. 成果と課題

本実践は、H29 指導要領で書写に求められる「文字そのものの文化」と「文字を書くこと」の両面を見据え、内容を組み立てたものである。「文字文化の豊かさ」を中学生が経験し、感じ取れる活動内容を実施した。実践後のアンケートのコメントから、生徒は1) 文字そのものへの興味関心が強まり、2) 文字を書くこと（創作）の楽しさを感じ、3) 文字表現の多様性や個性を捉えることができている様子を確認することができた。

一方で、コメントの中には、活動内容が「難しかった」というコメントも一部見られ、創作を楽しめていなかった生徒もいたようである。今回は、事前にウォーミングアップとして運筆を練習する等の時間を設けることができず、筆で書く感触を思い出せないまま、創作を進めていくことになったため、「難しい」と感じたのであろう。実践を行う前段階での指導のあり方についても考えていく必要を感じた。

令和3年度からH29指導要領での書写指導が実施される中で、豊かな「文字文化」を育むための実践のあり方について、今後も継続し研究を進めていきたいと思う。

## 注

- 1) 青山（2018）でも、H29 指導要領における「文字文化」の二面性が指摘されている。p.67
- 2) 平成30年版高等学校学習指導要領・国語では、新たに必修科目「現代の国語」が設置され、「中学校書写との関連を図り、効果的に文字を書く機会を設ける」とこととされた。この「文字」については、電子文書作成の際にも、フォント選択やレイアウトの際に、書写で身に付けた能力を活用できる点に触れられている。
- 3) 実際には点画と点画が繋がっていないが、点画を書いていく上では気持ちをつなげ、筆を動かしていくことである。筆脈が切れないようにするためには「できるだけ一字は一筆で書く習慣をつけることが大切」（『書写・書道用語辞典』）とされている。
- 4) 附属中学校で使用されている学校図書・書写教科書「中学校書写」p.40に『蘭亭序』が取り上げられており、同じ箇所を印刷し、配布した。
- 5) 3年次の美術の篆刻授業の際、自分の名前の篆書体を確認するために字典を使っており、「字典」という書籍の存在については皆、理解していた。
- 6) 書写教科書、前掲書、p.114に、常用漢字2,136字が硬筆行書体で書かれている。名前を書く場合などにも、この一覧を使用し、行書体での書き方を確認することが可能である。
- 7) 半紙は24.2×33.3 cmであるため、今回使用した紙は縦横に約10 cm大きく、ほとんどの生徒が初めて書く大きさであった。
- 8) 三重県出身の書道家・書道史研究者である魚住和晃氏による揮毫作品である。

- 9) 生徒は使用国語教科書（三省堂）で、1年次に「故事成語－矛盾」、2年次に「漢詩の世界－李白・黄鶴楼送孟浩然之広陵、杜甫・春望、杜甫・絶句」、3年次に「論語」を通し、漢詩・漢文の学習をしている。
- 10) 1名、さんずい偏と「夏」を組み合わせ、新字を作っていた生徒もいた。
- 11) 書道での創作時に、字書にない漢字を他の漢字の部分を参考に書くことは一般的な方法である。
- 12) 「落成款識(らくせいかんし)」の略。作品が完成した際に、作者が署名・押印することを意味する。
- 13) 注5)でも触れたように、3年次の美術の時間に全員が約3×3 cmの印を彫っており、それを使用することとした。生徒は、自分で彫った印を初めて「印」として使用することになっていたようだ。

## 引用参考文献

- 青山浩之（2018）「新学習指導要領における国語科書写の要点と実施に向けた課題－中学校国語科書写の要点と実践の方向性－」『書写書道教育研究』第32号、全国大学書写書道教育学会
- 杉崎哲子（2017）「主体的に取り組む書写学習の振興－付属校との連携を深めて－」『研究紀要』第22集、日本教育大学協会全国書道教育部門
- 全国大学書写書道教育学会編（2020）『国語科書写の理論と実践』萱原書房
- 二玄社（2007）『大書源』
- 橋本栄一・内山裕美・田中秀征・山下由季（2020）「中学校国語科書写における「身の回りの書」について－東京学芸大学附属中学校における教育実践報告－」『研究紀要』第25集、日本教育大学協会全国書道教育部門
- 松村明監修『デジタル大辞泉』小学館
- 藤原宏・加藤達成・永田作治・堀江知彦編（1978）『書写・書道用語辞典』第一法規出版
- 星川清孝（1963）『新釈漢文大系9 古文真宝 前集上』明治書院
- 【学習指導要領解説】  
『中学校学習指導要領（平成20年告示）解説 国語編』文部科学省  
『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 国語編』文部科学省  
『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 国語編』文部科学省

## 謝辞

本実践を行うにあたり、三重大学附属中学校国語科の上野雄司先生から多くのご支援を頂きました。厚くお礼を申し上げます。